

皆さんは、自分で自分を褒めたいと思ったことがあるだろうか。私はない。少し古い話になるがアトランタオリンピックの女子マラソンで日本人選手が銅メダルに輝いている。ゴール後のインタビューの中で、その選手が発した言葉が「自分で自分を褒めたいと思います」であった。この選手こそ、女子マラソンでバルセロナオリンピック銀メダル、そしてアトランタオリンピックで銅メダルをとった有森裕子さんである。

有森さんが高校、大学と実績がなかった選手であることは知っていた。女子マラソンでは、実績がなかった選手が成長し、世界の舞台で活躍することが多いように感じる。オリンピックでは、メダルに輝いた選手のインタビューから名言が飛び出すことが多い。それがアトランタオリンピックでは有森さんの言葉だった。

最近、この言葉が出てきた背景を知った。岡山県に生まれた有森さんが進学した高校は陸上の強豪校だった。どうしても陸上部に入りたかった彼女は、「素人は入れない」と何度断られてもあきらめずに先生に直談判した。1か月半かけてついに入部が叶った。しかし3年間補欠だった。毎日誰よりも粘り、全力で与えられた練習メニューをこなした。へこたれない姿を見ていた陸上部の先生は彼女にこう言った。「あきらめないことはお前の大きな武器だ。これからも粘れ。いつか前のやつが落ちてくる」

そして日本体育大学に進む。大学4年のとき3000メートルで勝ったことをきっかけに実業団の扉を叩く。そこで出会ったのが、あの有名な小出監督だった。ここでも直談判。全力で自己アピールした結果、小出監督からこんなことを言われる。「実績がないのによく陸上を続けてきたね。やる気は一番あるかもしれない」誰も彼女がメダリストになるとは思ってはいなかっただろう。国体にもインターハイにも出ていないのだから。小出監督は言っている。「身体能力の素質と気持ちの素質が人間にはあるが、気持ちは身体を超えるかもしれない」

無心で走ったバルセロナの銀メダルとは違い、アトランタの銅メダルは、心身ともに自分の限界と人生を賭けてメダルを獲りに臨んだ勝負の結果だった。そのとき思わず出た言葉が「自分で自分を褒めたいと思います」だった。高校時代の陸上部の先生は彼女に「これからも頑張れ」とは言っていない。「これからも粘れ」と言っている。そして「いつか前のやつが落ちてくる」と。この言葉がなかったら、小出監督との出会いもオリンピックのメダルもなかったことだろう。

皆さんは、学校の先生にかけてもらった言葉で心に残るものはあるだろうか。人それぞれではあるが、きっと褒められた言葉が残っているのではないか。私は高校時代、さっぱり勉強ができなかった。正確に言うと、高校1年生の夏くらいから授業についていけなくなり、努力することをあきらめた。幸いにも部活動をやっていたので、何とか高校生活を続けることができた。当然、褒められる機会などあろうはずがない。担任の先生の英語の授業で順番に英語の1分間スピーチをやっていた。私の番がまわってきた。嫌だった。部活動のことを英語でスピーチした。そしたら褒められた。先生からすると何気なく褒めただけなのだが、劣等生である私は、そのことをずっと覚えているのである。

月日が経過し、私は教員として私の英語のスピーチを褒めてくれた高校時代の恩師と再会した。私のことなど覚えているはずがないと思いつつ名刺を差し出した。すると、その先生が反応した。覚えていてくださったのである。うっすらぼんやりと名前を覚えている程度だと思うが嬉しかった。

有森さんのお父さんは教員である。いったい彼女をどのように育てたのだろうか。あきらめないとよく言うが、彼女のようにできる人は、ほんの一握りだろう。しかし、だれでもがんばった経験はあるのではないか。そのとき、心に残るような言葉と出会うことができたなら素敵なことである。梁川高校の生徒たちの心に残っている言葉は、いつ、どんな方からいただいた言葉なのだろうか。